

は、誤解を招きやすい。その理由は二つある。第一に、ナショナルリズムというのは、攻撃的な内容をもっている。しかるに文化自体はそれ自身のアイデンティティを求めるだけであって、敵を求めるものではない。第二に、今日のカナダ文化はナショナルな次元での発展ではなく、各地域それぞれの発展の総和である。ブリティッシュ・コロンビア州で起っていることは、ニュー・ブランズウィック州やオンタリオ州で起っていることと同じではない。モントリオールがなぜあれほど活気のある文化的中心地なのかという理由の一つは、そこにはたくさんさんのモントリオールがあり、それぞれが各自の複雑さと内的葛藤をもつて存在しているからだといえる。

カナダには独自の教会は成立しなかったが、教会と国家との間には非常に密接な結びつきがあった。この傾向はとくに教育において著しく、これがカナダ文化に独特の色調を落としている。人種のるつぼ¹につきものの国をあげての融合努力が全く見られないカナダで、マイノリティ（少数者）はごく自然に吸収されているが、私にはこの理由が、英国女王が象徴するもの、つまり国家の首長と政府の首長との分離に関係あるように思われる。カナダは二つの民族によって建国されたために、百パーセント純粹のカナダ人がどんなものであるか誰にもわからない。ここに、文化にとって必要な遠心性のリズムが広がる余地が生まれたといえよう。

だがそれ以上に重要なのは、人と土地とはきわめて深い関係にあるというカナダ人の感覚であろう。カナダ文学あるいはカナダの絵画には、どこを向いても自然の世界が出てくる。

最も技巧的なアーチストでさえ、その想像力をこえたどこかに、非常に原始的なものを持たずにはいられない所がある。土地に対するこの感覚は、土地を所有しているという感覚ではない。

逆には所有してこなかったという感覚といつてよい。人間が汚し、閉じ込め、犯しはしたが、決して共に生きようとはしなかった自然がここにあるのだという感情だ。カナダの犯した罪の一大震源地を言えば、自然に対する暴力という点になるのではあるまいか。カナダ文学には、動物の死が頻出し、共鳴しあっているように思われる。まるで、カナダの毛皮貿易確立の犠牲となって捕えられ、責めさいなまれた生き物たち全員の叫びが、今でもわれわれの心にこだましていくかのようである。

十九世紀の修辭詩人たちは、死の感覚にも似た、哀愁を帯びあるいはノスタルジックな気分で、彼らの傑作を書いた。



トム・トンプソン作「十月の雪」(1944年、トロント市のDr. J.M. MacCallumより遺贈)。
The National Gallery of Canada, Ottawa

また物語詩人は、丸太が密集した川や氷河上での死の物語、ハンターが獲物との一体感を次第に築いていくような狩猟の旅とそこにおける死の物語を語っている。このようなことはもちろんカナダに限ったことではないかもしれない。しかしとりわけカナダでは強烈に表われ、その重々しい文学、とくに詩の多くに、非常に暗い外観を与えている。

最近の絵画、アレック・コルビルやクリストファー・ブラットの擬似リアリズム、あるいはジャン・ポール・レミュー描くところの幽霊のような人物像には、一種の孤独感、虚無感が漂っていることが多い。自然の精霊を描くインディアンとエスキモーの芸術に対する関心は、一

種の陶醉にまで高まっているし、若い詩人の多く（スーザン・マスケレップ、ジョン・ニューラフ、グウェンドリン・マキューエンなど）は、あたかもインディアンやエスキモーがわれわれの文化上の直系先祖であって、その伝統が彼らのみならずわれわれの間にも継承されているかのように、詩をよんでいる。小説分野では、たとえばマーガレット・アトウッドの“Surfacing”やマリアン・エンゲルの“Bear”といった、文明に背を向け、自然との一体化を志向する主人公を描いた一風変わった小説が書かれている。われわれはもはや、他所からやってきた占領軍ではなく、原住民はわれわれ自身なのである。

このアメリカ大陸を大勢の人間が占拠している。その占拠について、異なったイデオロギーにもとづき、異なった歴史の伝統を背負った、（アメリカとは）別の見解があるのだということは、アメリカ合衆国自身にとってもきわめて重要なことであろう。そして、かつては地球の端にあり、今日では世界の列強に囲まれた一種のスイスのような国が、自国文化の“本国帰還”（repatriation）を成し遂げたということも、世界全体にとって大きな意味をもつことに違いない。これが過去二十年の間に、カナダ各地で起こったことである。かつて地図上で境界も定かならなかった地域が、成熟し陶冶されたイマジネーションの目と口をもって、世界に反応しつつあるのがカナダ文化の現状である。